

■ 編集だより

編集後記

東日本大震災から1年間を経て被災県で精神医療・精神保健に関わる中で精神疾患を捉えることの難しさを改めて感じます。被災した自治体の保健師さん達と仮設住宅や民間賃貸のお宅を訪問したり、茶話会を開いて直接いろいろな方と直接お会いしたり、また、広く被災者への問診票調査を行ったりもしていますが、被災地域のどこでどのような方がどのような状態で生活されているのかを把握することは中々に難しく、また限られた機会、時間の中で一人一人の状態を把握するのも難しいと感じます。東日本大震災により一変した地域の中でそこから大きな影響を受ける人々と接するにつれ、手を打たないといけないという焦る気持ちを鎮めながらことに当たるこの頃です。しかし、考えてみれば、このような難しさは何も震災後発生した新しい問題ではなく、震災の前から地域では様々な精神行動の問題を持った方が生活しており、コミュニティとしての全体像や一人一人の状態を把握することが難しいのは、精神医学、精神医療そのものが持つ本質的な特徴で当たり前の事ではあるのでしょうか。

震災前の私は、精神科臨床医の活動に活かすべく精神療法/精神病理学や社会精神医学の情報をアップデートしつつも、研究面では生物学的研究を主たるテーマに活動してきました。震災後、期せずして被災地での活動を始め、改めて、罹患者の方一人一人を理解する上でも、疾患病態や回復のメカニズムの全体像を明らかにする上でも精神療法/精神病理学、社会精神医学のアプローチの各々が重要なだけでなく、各々のアプローチを不可分に進めて行くことの重要性を感じています。各領域の医療保健福祉従事者や研究者と密接に協働しながら、自らも研鑽を積まなければならないと感じます。

精神神経学雑誌は日本精神神経学会の機関誌として、精神病理学的側面、社会精神医学的側面を中心とする活発な議論を含みながら、幅広く精神医学・医療の領域をカバーする雑誌として長年、読者として親しんできましたが、近年は生物学的側面についての記事、論文も取り上げられることが多くなってきたのは喜ばしいことと思っていました。近年、学問の世界では学際的であることが推奨されますが、今後、精神医学の世界でも、生物学、精神病理学、社会精神医学の各領域の融合が望まれるところで、本誌の編集に関わる上でも、多領域の記事、論文が足し算ではなくかけ算として働くようなことを意識しながら関わらせて頂ければと考えています。

生物学的研究を行う研究者は、自らの研究成果を全世界に発信し共有する必要があることから、英文雑誌に公表するのが常です。しかし、科学技術が国際的に今までも増して急な勢いで発展してきている一方、日本において議論すべきテーマ、日本の精神科医の間で情報共有を行うべきテーマ、日本語でこそ有意義な議論を行えるテーマも沢山あるように思います。本誌が領域をまたいで有意義な情報共有の場、議論の場として機能するよう及ばずながら一助となればと思います。

富田博秋